

氏 名	い 藤 のぶ ひろ 伊 藤 宣 広
学位(専攻分野)	博 士 (経 済 学)
学 位 記 番 号	経 博 第 217 号
学位授与の日付	平 成 17 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	経 済 学 研 究 科 経 済 シ ス テ ム 分 析 専 攻
学 位 論 文 題 目	20世紀初頭のケンブリッジ学派におけるマクロ経済分析の展開

(主 査)
論文調査委員 教 授 小 島 専 孝 教 授 根 井 雅 弘 教 授 八 木 紀 一 郎

論 文 内 容 の 要 旨

伊藤宣広氏の博士学位申請論文『20世紀初頭のケンブリッジ学派におけるマクロ経済分析の展開』は、マーシャルを軸に、古典派からマーシャルに至る継承関係とマーシャルから後継世代に至る継承関係という2つの継承関係に注目しつつ、ケンブリッジ学派のマクロ経済分析の展開を跡付けた研究で、第1章「本研究の課題」、第7章「結語」ほか、次の6章からなる。

第2章「マーシャルの貨幣・信用理論～現金残高アプローチと時間概念～」において著者は、マーシャルの現金残高アプローチは、考察する期間の長さに応じて需要・供給要因の重要性が変化するマーシャルの価値論体系に対応したものであり、古典派においては別次元の議論であった貨幣価値の決定と信用循環の議論を統一的に扱う枠組みであると論じている。マーシャル以後のケンブリッジの経済学は景気循環論に代表されるマクロ分析の領域で著しく進展するが、それを用意した基礎の一つが現金残高アプローチであるとして、これまで数量説の比例命題を表す別バージョンとしてしか認識されてこなかった現金残高アプローチの分析的射程の広がり注意到を促している。そして信用循環に代表される短期的変動を「例外」とする古典派と「正常ではない」とするマーシャルとでは、現象としての位置付けに大差はないが、長期分析とまったく異なる議論をする古典派に対して、現金残高アプローチは短期と長期とを含みうる体系であり、後継者との相違は現象の重要性に関する認識の相違であり、分析的には強調の相違に過ぎないと論じている。

第3章「マーシャルと物価水準」では、物価水準に関するマーシャルの見解を考察している。エシャッグはマーシャルの見解は時期によって変化があり、物価上昇支持→物価下落支持→物価安定支持と叙述しているが、著者はエシャッグが激しい物価変動と緩やかな物価変動というマーシャルの根本的区別を看過していることを指摘し、マーシャルの判断基準として①階級間の所得分配②信用循環に対する警戒③改良・発明に対する誘因および労働者の生活水準に対する影響を挙げ、マーシャルの立場は、物価の激しい変動は害悪とするものの、有機的成長を促進する際に付随する緩やかな変動は容認する、というものであることを明らかにした。その上で後継者たちとの比較をピグー、ケインズ、ホートレーについて行っている。また、貨幣改革に関するマーシャルの提案（計表本位制と合成本位制）について詳細に検討している。

第4章「ホートレーの貨幣的景気循環理論と所得数量説の発展」では、従来ケンブリッジ学派の周辺として扱われ、学説史上の位置付けについて仔細に検討されたことがないホートレーについて、バジョットの貨幣・金融理論、マーシャルの貨幣理論および商人に関する議論と対比して検討している。ホートレーの理論は特定の系譜に位置付けるのは困難であるが、マーシャルの現金残高アプローチの短期における理論的展開としてはピグーよりも傑出しており、ピグー・ロバートソンとは異なる方向でのマーシャル的伝統の展開であるとしている。

第5章「ピグーのマクロ経済分析」では、マーシャルの直接の後継者であるピグーがマーシャルを継承していることは当たり前とされ、その継承の方向性やマーシャルとの異同について詳細に検討されたことがないピグーについて、景気循環論、失業論、現金残高アプローチの定式化の3つを検討し、ピグーがマーシャルから受け継いだ最大の要素は知識および心理的

要因を重視する姿勢であると論じている。

第6章「D. H. ロバートソンの産業変動論とマーシャル的伝統」では、従来詳細に検討されることがなかったロバートソンの処女作『産業変動の研究』を検討している。ロバートソンの重要な業績の多くが既に『産業変動の研究』に現れていることが指摘されているほか、十分に検討されることなく「大陸的」と言われているロバートソン理論をアフタリオン理論と比較検討することにより、大陸経済学とある程度共通する概念を用いながらも、それらの概念をマーシャル流の分析と調和するような形で展開しているところにロバートソンの特徴があるとしている。ロバートソンはケンブリッジ学派にあって「非マーシャル的」と評価されているが、著者はマーシャルとロバートソンの相違と見られるものは概してマーシャルが本格的に展開することのなかった経済変動論の領域にマーシャル的分析装置を応用したと解釈することで解消されるのであり、ヴィジョンおよび方法論の面ではマーシャルとロバートソンとは重要な点で共通点があることを指摘している。たとえば、従来は「物価水準の安定は必ずしも望ましいとは限らない」というロバートソンの主張はマーシャルとの断絶の決定的証拠とされているが、著者によれば、マーシャルが容認する緩慢な物価変動と否定する激しい物価変動は、それぞれロバートソンの「適当な変動」と「適当でない変動」に対応するものであり、「進歩と安定の不調和」というロバートソンのヴィジョンは、停滞的な安定よりも活発な技術革新に基づく進歩、有機的成長を志向するマーシャルのヴィジョンと親和的とされる。また著者は『産業変動の研究』におけるロバートソンのセー法則批判を取り上げ、ロバートソンのセー批判は一般的過剰生産に関するロバートソンの特異な理解に基づくもので、事態の捉え方は古典派・マーシャルと大差ないことを明らかにしている。ロバートソンについては、ロバートソンの独創的部分がクローズアップされる時期である1920年代の議論（『銀行政策と価格水準』（1926年）の議論）および1930年代になって登場する利子論についても検討されている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、ピグー『富と厚生』（1912年）、ホートレー『好況と不況』（1913年）、ロバートソン『産業変動の研究』（1915年）など、マーシャルの後継者たちの処女作が登場する1910年代を中心に、20世紀初頭のケンブリッジ学派におけるマクロ経済分析の展開を、マーシャルを軸に、古典派からマーシャルへの継承関係およびマーシャルから後継世代に至る継承関係という2つの関係に注目して分析した理論史研究である。ケンブリッジ学派にかかわる研究の多くが結果として『一般理論』を終着点としているのに対して、本論文は特定の終着点を想定せず、マーシャル経済学の多様な展開過程として捉えようとする点に特色がある。

本論文は次の点で高く評価される。

第一に、理論家に関する個別研究の集成になりがちな学派研究にあって、継承関係を正面から扱った学派研究を試みていることはそれだけでも評価されるが、本論文はマーシャルのオーラル・トラディションを理論的に再構成したといえるものを提示している点で高く評価される。

第二に、マーシャルのマクロ分析に関して、特に、現金残高アプローチの捉え方、物価変動に関するマーシャルの見解を明らかにしたことに貢献がある。マーシャルについての学史的な研究は理論家の関心と異なる領域を対象とするものが多く、マーシャルの貨幣・信用・景気理論に関する研究は極めて少ない。またケインズ理論形成史研究では、『一般理論』におけるケインズの議論との関連からマーシャルを見るという傾向があり、マーシャルのマクロ分析については断片的にしか扱われていない。著者は、これまでは数量説の比例命題を表す別バージョンとしてしか認識されてこなかった現金残高アプローチは、マーシャルの『経済学原理』における時間分析に対応するものであり、古典派においてはまったく別個の議論であった貨幣価値の決定と信用循環の議論とを需要と供給という同じ分析装置で統一的に把握する枠組みであると論じ、現金残高アプローチの分析的射程の広がりを認識させることに成功している。また、物価水準に関するマーシャルの見解を明らかにしたことも貢献のひとつである。物価変動に関してマーシャルが時期によって見解を変えていることはよく知られ、特にエシャッグによる物価上昇支持→物価下落支持→物価安定支持という叙述が流布しているが、著者はエシャッグが激しい物価変動と緩やかな物価変動というマーシャルの根本的区別を看過していることを指摘し、マーシャルの判断基準として①階級間の所得分配②信用循環に対する警戒③改良・発明に対する誘因および労働者の生活水準に対する影響を挙げ、マーシャルの立場は物価の激しい変動は害悪とするものの有機的成長を促進する際に付随する緩やかな変動は容認するというものであ

ることを明らかにしている。

第三に、ロバートソンの景気変動分析に関する貢献がある。従来のロバートソン研究はケインズとの関連で『銀行政策と価格水準』を中心に議論されてきたが、著者はこれまで詳細に検討されたことがほとんどない『産業変動の研究』を中心に、ケインズではなくマーシャルとの関連を重視してロバートソンの景気変動分析を検討している点が新しく、また次のようないくつかの知見を得ている。①「異質的」、「非マーシャル的」と評価されることが多いロバートソン理論について、ロバートソンは懐妊期間の存在によって生ずる生産性格差に基づく超過利潤は準地代としてマーシャル的枠組みに鑄直しているように、大陸経済学の概念を駆使していても、その論理展開は同じではなく、むしろマーシャル的であること。②ロバートソンの「物価水準の安定は必ずしも望ましいとは限らない」という主張をマーシャルとの断絶の証拠とするレードラーに対して、物価水準に対するマーシャルの見解の検討に基づいて、そのような解釈が不当であり、むしろ「進歩と安定の不調和」というロバートソンのヴィジョンは、停滞的な安定よりも活発な技術革新に基づく進歩、有機的成長を志向するマーシャルのヴィジョンと親和的であること。③『産業変動の研究』におけるロバートソンのセー法則批判は、一部の論者が与える高い評価とは裏腹に、ロバートソンの特異な「一般的過剰生産」解釈に基づくもので、事態の捉え方に関して古典派・マーシャルと大差ないことを明らかにしたこと、などがある。

第四に、ホートレーの学史的 position 付けについて初めて包括的な検討をおこなったことがあげられる。また、ホートレーが自身の理論の起源をバジョットまで遡ると主張していることをうけて、貨幣および金融政策の考え方に関してバジョットとホートレーを比較検討しているが、これも本論文が最初の試みである。

しかしながら、いくつかの改善すべき課題を指摘できる。

第一に、マーシャルと後継世代との検討においてしばしば時代背景の変化という言葉が使われているが、イギリス経済史にかんして踏み込んだ議論をする必要がある。

第二に、20世紀初頭ということでケインズは主役の一人ではないが、本論文はケインズ研究・ケインズ経済学形成史研究に対して再考を促すものがある。著者はそれらの研究とは補完的關係にあるというだけであるが、研究対象を20年代、30年代まで広げていくならば、積極的に述べなければならないだろう。

とはいえ、これらの課題は著者の今後の研究に期待するものであり、本論文の貢献をいささかも損なうものではない。よって、本論文は博士（経済学）の学位論文として価値あるものと認めた。なお、平成17年2月14日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。